# 学園アリスの世界に転生

青桐悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園アリスの世界に転生

【Ｎコード】
Ｎ３６２０Ｚ

【作者名】
青桐悠

【あらすじ】
主人公が学園アリスの世界に転生して色々する話。

# 1話　転生直後

目を覚ますと赤ん坊になっていた。

いくらテンプレ通りの台詞（せりふ）が面白いとはいえ何回も同じことやってたらさすがに飽きるな。次からは別のにしよう。

考え込む俺を余所に周囲はテンプレどおりに進んでいく。

「名前は何にしようかしら」

「清見なんてどうだ」

「いい名前ね」

「清見、元気な子に育てよ」

どうやら名前は清見に決まったようだ。

もう一人の転生者は柚香って名前なのか。柚も清見も柑橘系の果物の名前で蜜柑の仲間だったな、てことは転生先はあの世界かな。

考え事してたら眠くなってきた。寝るのも食うのも好きな俺としては食っちゃ寝できる赤ん坊の時期が一番好きだったりするので、睡魔に抗うことなくすぐさま眠りに落ちた。

## 2話　夢の中

目を開けたら学園アリスの佐倉蜜柑にそっくりな少女が俺の顔を覗き込んでいた。

「おはよう」

「おはよう。じゃ無くて、此処はどこ？　私は誰？　じゃ無かった君は誰？　」

「ここは夢の中で私は安積清見。他に質問は？　」

「安積ってことはやっぱ此処って学園アリスの世界？　夢の中っていうのは何らかのアリスを使った？　」

「そうだよ。私は夢使いのアリスなんだ。あなたは？　」

「俺は安積柚香。アリスは・・・増やすアリスだな」

「今の間はいったい？　」

とりあえず神に殺されてから今までの経緯を簡単に説明した。

「何回目かの転生のときに分析のスキルを手に入れてたからそれを使って調べたのにかかった時間。それよりこれからどうする？　」

「というと？　」

「アリスをもってることを隠して学園にかかわらないでいるか、そ

れとも積極的にかかわって原作介入しまくるか、はたまた別の選択肢を選ぶかどれにする？」

どれを選ぶにしろ俺は彼女に対する協力を惜しみはしない。

不幸な人と一緒にいるより幸せな人と一緒にいたほうが楽しいのだから。

## 3話　作戦会議

話し合いの結果。安積柚香（蜜柑の母親）のことを伯母さん、行平泉のことを叔父さん、他の登場人物に関しては蜜柑と同じ呼び方で統一する事に決めた。原作介入についてはできる限り最大限引っ掻き回すことにした。

「柚香？」

「何？」

「ちょっと実験したいことがあるんだけどいいか？」

「いいけど。何するの？」

「夢使いのアリスは魂を夢の中に連れて行くアリスだろ？　今まで試した相手は全員目が覚めると同時に体に戻ったから、戻るからだの無い死者の魂を生者の夢の中に放置するとどうなるか試して見ないか？」

「おもしろそうだね」

「だろ？　問題は誰で試すかだが・・・」

「蜜柑と叔父さんで試さない？」

「ちなみに理由は？」

「もちろん。それが一番面白そうだから」

「なるほど、んじゃそれで決まりだな」

## 4話　佐倉蜜柑と接触

「今日は」

「え？　は？　え？　」

柚香がにこやかに話しかけているのとは対照的に蜜柑は混乱したかのように意味のなさない単語を羅列している。

・・・いきなり目の前に自分と瓜二つの少女が現れたら誰だって混乱して当然か。

「はじめまして。俺は安積清見、こっちのお前にそっくりなのは安積柚香。お前は？　」

「うちは佐倉蜜柑。あんた等は何でいきなり目の前に現れたん？　」

「いきなり目の前に現れたわけじゃない」

「清見、それじゃ意味不明だって。もうちょっと判りやすく言おう」

「柚香は夢使いだ」

俺の説明に対して柚香は呆れたようなため息をついた。

「もういいわ。私は生まれたときから夢から夢へ移動することが出来るの。夢の中に入らずに夢を覗くこともできるけど夢に入らなければ存在に気付かれないの」

「解ったか？　」

蜜柑はあまり理解できてないようだがそれでも考えて答えをひねり出した。

「つまり、柚香と清見はずっと目の前に立ってたけどうちが気づいてなかっただけってこと？　」

「そういうことだ」

「夢の中を散歩してたら偶然、蜜柑ちゃんを見かけて、私にあんまりそっくりだから声をかけようと思ったんだけど夢の中に入るのを忘れてたから私たちの存在に気付いてもらえなくて・・・」

「夢の中に入ってないのが原因だから夢の中に入れば良いってことに気付いたけど蜜柑の目の前で夢の中に入ったらいきなり目の前に現れることになるという事には気付かなくてな」

「驚かせてゴメンね？　」

「ううん。別に構わへんよ」

「柚香、そろそろ時間だから帰るぞ」

「え？　今何時？　」

「だいたい０７：００ぐらいだな。てことで蜜柑、また明日」

「蜜柑ちゃん、またね」

## 5話　行き平泉と接触

伯父さんの夢の中を何食わぬ顔をして歩いていると柚香の存在に気づいた叔父さんが驚いて声を上げた。

「柚香！？　」

やっぱり間違えたか。柚香と伯母さんそっくりだもんな。

俺はあえて不思議そうな顔をしながら柚香に聞いた。

「柚香、知り合いか？　」

「ううん。始めてあった」

「人違いかな？　」

俺たちの会話を聞いていた叔父さんが口を挟んだ。

「もしかしてお前は安積由香って名前じゃないか？　」

「確かに私は安積柚香だけど・・・何で知ってるの？　」

「俺は生前、アリス学園で教師をしていてその時の教え子の一人にそっくりなんだ」

「そういえば、お父さんには柚香って名前のお姉さんがいたって言ってたね」

「つまり、柚香と伯母さんを見間違えたってことか」

「私と伯母さんってそんなに似てるのかな？　世の中には同じ顔をした人間が3人入るって言うけど本等だね」

「蜜柑も柚香と瓜二つだモンな」

蜜柑の名前を出した瞬間、叔父さんの顔が劇的に変わった。

伯母さんが蜜柑を妊娠してるのがわかったのは伯父さんが死んだ後だもんな。死んで十年近くもたってから実は娘がいたって知ったら驚いて当然だ。

「伯父さん、蜜柑にも会ってみる？　」

俺が言うが早いか柚香は伯父さんの手をつかんで歩き出した。

そういえば伯父さんはこの状況を理解しているのだろうか？

## 6話　作戦実行

「よう、蜜柑。久しぶり」

俺は開口一番にそう言った。

「久しぶりって、昨日が初対面でしょ」

俺のボケに対して柚香が突っ込む。

「柚香、解ってないな。よく言うだろ？　親友に時間は関係ないって」

「それは意味が違う」

もはや漫才になってしまった俺たちをよそに蜜柑とおじさんで話し出した。

「俺は行平泉。お前は？　」

「うちは佐倉蜜柑」

「蜜柑は関西出身なのか？　」

「うん、うち京都の田舎のほうに住んでんねん」

「さっき昨日が初対面って言ってたけど親戚じゃないのか？　」

「ううん、昨日じいちゃん親戚がおるか聞いたけどおらんって」

そろそろ起きる時間だな。実験内容を話すことにしよう。

「蜜柑、実は蜜柑の夢の中に伯父さんを連れてきたのには目的があるんだ」

「目的って何？　」

「昨日、柚香は夢の中を移動できるって言ってただろう？　あれは魂だけ夢の中に移動させてるんだけど魂を夢の中に置き去りにしたらどうなるかって言う実験をこれからするんだ」

「魂を夢の中に置き去りにするって、つまり二度と起きられへんくなるってこと？　」

「大丈夫。伯父さんはもう死んでるから起きれなくても困ることは無いわ　」

「んじゃ、おやすみ～」

「お休みじゃなくてお早うだと思うよ」

## 7話　原作開始当日

伯父さんの魂を蜜柑の夢の中に放置してから2年半の月日が過ぎた。

「蜜柑ちゃん、何で怒ってるの？　」

蜜柑は今日、怒りながら寝たのか夢が始まったときからずっと起こっている。

おそらく今日が原作開始初日なのだろう・・・柚香は気づいてないのかあえて無視しているのか。そ知らぬ声で蜜柑に問いかける。

「聞いてよ柚香、あんな・・・」

予想通り原作1話目の内容を語る蜜柑と予想通りだといわんばかりの表情をする柚香。

・・・柚香って意外と演技はなのかも

「つまり、蜜柑ちゃんは蛍ちゃんが蜜柑ちゃんに黙って転校したことに対して怒っているのね」

「うん、蛍が転校すること知らんのうちだけやった」

「蛍ちゃんが転校することをいわなかったのは蜜柑ちゃんのことをどうでも良いと思ってるからだと考えてない？　」

蜜柑は押し黙った。おそらく図星なのだろう

「転校することを言われなかったのは蜜柑ちゃんがどうでどうでもいいんじゃ無くて、むしろその逆だと思うよ」

「そもそも、転校なんて重大なことはどうでもいい奴よりもむしろ大事であればあるほど言い出し難いものだしな」

「だから、蛍ちゃんが蜜柑ちゃんに黙ってたのはどうでも良いからじゃなくて、むしろ大事だったからだと思うよ」

さっきから黙ってる伯父さんにも釘刺しとくか。

「伯父さん、さっきから黙ってるけど伯父さんもなんか言えよ」

「清見、よく見たら伯父さん蜜柑ちゃんの夢に干渉できてないや」

「というと？　」

「つまり、蜜柑ちゃんに伯父さんの姿は見えてないし声も聞こえないってことだよ」

「何で？　」

「伯父さんはアリスで蜜柑ちゃんの夢から出られないだけで夢使(ありす)いを使ってるわけじゃないから蜜柑ちゃんの夢に干渉できない。つまり、蜜柑ちゃんが考え事に集中してたら伯父さんは夢からはじき出されるんだ」

「柚香の夢使(アリス)いでどうにかできないのか」

「蜜柑ちゃんと伯父さんの夢を操って1つにしたら伯父さんが夢からはじき出されることは無くなる・・・っとできた。これで出来た」

伯父さんを素通りして向こう側を見ていた蜜柑の視線が伯父さんに留まった。

「これで寝てるときだけじゃなくて起きてる時も会話できるようになるよ。それと伯父さんと蜜柑ちゃんの体の主導権を入れ替えることも出来るようになったよ」

「何でもっと早くしなかったんだ？　確か前やろうって言ってたよな？　」

「うっ・・・それは」

「今まで忘れてたな」

「そっそういえば蛍ちゃんもアリスだったんだね」

「蛍もって、他にもアリスを知ってるん？　」

「あれ？　言ってなかった？　私はもちろん清見と伯父さんもアリスだし、伯父さんなんか昔アリス学園の教師やってたって」

「そもそも夢使(アリス)いを使わずにどうやって毎晩、蜜柑の夢の中に来てると思ってたんだ・・・って何も考えてなかったのか」

「・・・」

「清見、そろそろ起きようか」

図星を指されて落ち込んでる蜜柑を見かねた柚香が助け舟を出した。

どうせ5分とたたずに復活するから必要ないのに。

「じゃあな」

## 8話

「うち、今アリス学園に向かってんねん」

2話目突入か。半年って長いようで短かったな。

「蜜柑ちゃんアリス学園に向かってるって何で？　入学するわけじゃないんだよね？　」

柚香の演技力は日毎に増してる気がする。

「蛍に会いにいくんや」

「友達に会うために1人で京都から東京まで行くのか。立派だな」

「うち、東京まで1人で行ってるって清見にゆったっけ？　」

「柚香の夢使(アリス)いは入ってる夢の主が聞いてる声を聞くことができるからな」

「清見は私ののアリスストーン(石)を持ってるから蜜柑ちゃんを見た駅員の人が「女の子の1人旅なんて珍しいな」って行ってるのを聞いたの」

その時、もうじき東京に着くという放送が流れた。

「蜜柑、もうじき東京に着くぞ」

「そろそろ起きようか」

## 9話

「蜜柑ちゃん、どうだった？　蛍ちゃんには会えた？　」

「うん、うちアリス学園に入学することになったねん」

「ほう、蜜柑はどんなアリスなんだ？　」

「無効化のアリスや」

「名前から察するにアリスが効かないとかそこらへんか？　」

「うん、そうやで」

「それで、どういう経緯で入学したの？　」

「蛍に会おうとしてアリス学園の方向に向かってたら途中で詐欺師にあってな」

---

「えっアリス学園に入学するための塾がある！？　」

原作でも思ったことだが、蜜柑ってかなりだまされやすいタイプだよな。将来詐欺とか似合わないか心配だ。

詐欺にだまされてついて行きそうな様子の蜜柑に耳元で伯父さんが囁いた。

「蜜柑、こいつらの行ってることは出鱈目だ。アリスは生まれつきのもので後から手に入れれるものじゃない」

「えっ、出鱈目なん？　」

「出鱈目じゃないって、俺たちはちゃんと学園に認められて勧誘してんだって」

「蜜柑、ちょっと変わるぞ」

次の瞬間、伯父さんと蜜柑が入れ替わった。

蜜柑の体を借りた伯父さんが睨みつけると詐欺師たちは怖気づいたが、仲間たちがいる前で自分だけ逃げることは出来ないので精一杯の虚勢を張った。

「な、何眼つけてんだ。下手に出たらいい気になりやがって！　野郎共、殺っちまえ！　」

いっせいに殴りかかってきた詐欺師のこぶしを伯父さんがよけたその時。

「そこで何をしてるのかな？　」

「そのあと鳴海先生が詐欺師を追っ払ってうちをアリス学園に入学させてくれたねん」

「何事もなく蛍ちゃんに会えてよかったね」

「何事もなくどころか問題ありまくりやった」

「へえ、何があったんだ」

「変態エロ狐にパンツ脱がされた」

# 10話

「何があったんだ？　」

「棗が学園の壁、破壊して鳴海先生はその対応に行ったからうちは部屋で待機になったんやけど」

---

バンッ

「鳴海ーー！！温室から無断で鞭豆盗ったのお前かーー！！　」

よほど怒っているのかでかい音を立てて入って来た教師は蜜柑を見るなり謝った。

「すまん、人違いだ」

謝ると今度は静かに扉を閉めて出て行った。

「何やったんや。今の」

「あいつは植物作りのアリスを持ってるからな。杏樹がさっき使ってたむち豆のことで話が有ったんだろう」

「あっ、そういえば鳴海先生のアリス聞くの忘れてた！　」
「杏樹のアリスはフェロモン体質で使った相手を男女を問わず自分の虜にすることができる」
「お父さん鳴海先生と知り合いなん？　」
「俺が生前、担任をした生徒の一人だ」
「へえ、じゃあお父さんのこと知ったら喜びはるやろか」
「俺のことは黙っててくれないか」
「良いけど何で？　」
「それは・・・」
ヒュッ…
「え。」
「！？　蜜柑！？　」
棗にいきなり引っ張られて宙に浮く蜜柑。
「わ・・・！　」
「5秒で答えろ。答えなかったら、この髪燃やす。お前何者だ。」
「……っ」

「蜜柑、変わるぞ」

体の主導権を入れ替えたことにより雰囲気か一変する蜜柑。

「1？　」

棗はいきなり蜜柑が殺気を放ったことに驚いて声も出ない。

このままこう着状態が続くかと思われたその時、ガシャンッと窓が割れ、誰かが飛び込んで来た。

「……てぇ。」

「…遅かったじゃん。―流架。」

「誰のせいだと思ってんだよ。棗」

助けに来てやったのにー、と体についたガラスの破片を払いながら言う。そこで初めて蜜柑に気づいたようだ。

「何してんの？　それ誰？　」

「起きたらいた。しかも問い詰めたら殺気を放ちやがった」

バンッと扉が開き、ナル先生と岬先生が入ってくる。

「大丈夫！？　蜜柑ちゃん！　」

「棗っ、流架！！」

棗が離れた瞬間、わー！と先生に抱きつく蜜柑。よしよし、と頭を撫でていたら棗が窓から出ていこうとしていた。手には水玉模様のパンツを持っている。

「じゃあな”水玉パンツ”。」

「うぅおぉ！ウチもうお嫁に行けへん～；」

「パンツ脱がされたくらいたいしたことないってー。それに、大人はもっとすごいことするから」

「いや、大したことだろう…」

「蜜柑ちゃん、はい。」

ナル先生がピラと二人の前に出したのは学園の制服。赤のチェック柄のスカート、黒と白のセーラー。

「これ制服。泣いてる顔は蜜柑ちゃんには似合わないよ。」

---

「その後無事に蛍にあうことができたねん」

「よかったね」

「クラスメイトとは仲良くできたか？」

「それが・・・」

# 11話

「あ、お前。さっきの水玉パンツじゃん」

「あ、あの時の…。ヘンタイちかん男ーーーっ！！　よくも女(ウチ)の子にあんなことしておいてーー」

「女の敵っ、野蛮人っっ。謝れバカーー！！　」

蜜柑が棗に思いっきり突っかかった瞬間。蜜柑の体が持ち上がった。

「おい転入生。棗さんに何調子こいた口聞いてんだ、コラ」

と言うのは、蜜柑をアリスで持ち上げてる少年。その左手は何かを掴む形になっている。

ドンッ

持ち上げられた状態から落下して地面に激突する蜜柑。

「何！？　」

少年が再び手を動かすが蜜柑には何も起こらない。

「アリスが聞かない！？　」

「おい、水玉。お前どういうアリス持ってんだ」

棗が問いかけるが蜜柑は地面にたたきつけられた衝撃で咳き込むしかない。

「答えろ」

ようやく衝撃から立ち直った蜜柑だが、誰が言うかと言わんばかりにベッと舌をつきだす。そんな蜜柑にカチンと来たのか、やれ。というようにパチンと指を鳴らす。

「読めない」

心読みの台詞に教室内が騒然となった。

「何ですって！？　あんた何したの！？」

正田が驚いて叫ぶ

「そんなことよりこの変態エロ狐。うちに謝れ！」

「夏目君に何てこと言うの！」

1人の生徒が蜜柑に殴りかかったことにより喧嘩に発展した。しかし蜜柑と伯父さんが入れ替わってるため、蜜柑の方が優勢になっている。

「おい、水玉。お前一週間以内にこのクラスになじめなかったら正式入学できないんだってな。お前はこのままだと確実に入学はムリだな。」

「……。」

「そこから見える北の森。北こを通って高等部に足跡を残してくることが出来たら蜜柑をアリスとして受け入れてやる」

---

「蜜柑はその条件飲んだのか」

「うまくいった？　」

「うん、ベアとも仲良くなれたし。やってよかったと思う」

蜜柑とベアが仲良くなるのはもっと先のはずだが・・・

「何があったの？　」

「森でベアを見かけたときベアが可愛いから抱きつきに行ったら殴りかかってきて。お父さんとととっさに交代して防いだら喧嘩になって、喧嘩してたら仲良くなったねん」

なるほど。伯父さんを蜜柑に憑かせたことは話の進展を原作からかけ離すのに大きな影響を与えたようだな

## 12話

1年ぶりに叔父(柚香の父親)さんが尋ねてきた。

「清見、久しぶり」

「叔父さん、久しぶり」

「今日はお土産に飴を持ってきたんだ後で柚香と食べると良いだろう」

「叔父さん、美味しそうな飴ちゃん買ってくれてありがとう」

俺は甘いものより塩辛いもののほうが好きなんだが。子供の振りというのも疲れる。

「お父さん、清見と上の部屋で遊んで来て良い？　」

「良いよ。1年ぶりに会ったんだ。いっぱい遊んでおいで」

---

「子供の振りってのも疲れるな」

「仕方ないよ。私達まだ3歳だもん」

「そうだな、とりあえず飴でも食うか。一個も食わないわけには行かないだろ？　」

飴を口にする俺と清見、それが今後の人生に大きく影響するとも知らずに。

と、次の瞬間

柚香の姿が蜜柑と同じくらいの年齢になった。

ごくっ

驚いた衝撃で飴を飲み込んでしまった。

「「１０歳になった１？　」」

しかもでかくなった影響で服が破れて二人とも半裸になっている。

「もしかして！？　」

飴の袋を見ると＋７と書いてある

「ガリバー飴って飲み込んでも効果あったんだね」

「とりあえずこの半裸状態をどうにかしないといかんな」

念を使（ハンター）って服を作（ハンター）った。

「今のどうやったの？　」

「以前ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界に転生した時に覚えた念を使って作ったんだ。体のサイズに合わせて大きさが変わる機能が付いている」

「幸いこの部屋から外に出るときお父さんのいる部屋から見えないし元に戻るまで外で居ようか。この部屋だったら何時、誰が入ってくるか判らないし」

「そうしよう」

俺達は誰にも見られることなく玄関に到着した。

「無断で出かけると怪しまれるかもしれないな。一言声を掛けようか」

「そうだね」

俺は声を張り上げた

「ちょっと出かけてくるよ」

「気をつけて行ってらっしゃい」

---

「元に戻らない！？　４時間もたったのに」

「もしかして・・・薬の副作用かもしれない」

「そういえば私達よーちゃんとおない歳だもんね」

「このまま帰るわけに行かないし。どうしようか」

「そうだ！　」

影分身（ナルト）と変化（ナルト）を使って３０代くらいのおじさんを出す。

「何するの？　」

「ついてくれば解る」

---

「この子達が全裸で公園に居たので近くの店で服を買って此処につれてきたんです」

俺達は今、警察署に居る。名目は全裸で公園に居た家で少年達の補導だ。

しかし、俺たちは一言も答えない。ずっと泣き続けている。

当然、嘘泣きだ。

「名前は？　」

「君達は何で全裸で公園に居たのかな？　お父さんやお母さんは？」

---

「弱ったな。結局何も聞き出せないまま子供たちは寝ちゃうし、いったいこの子達はどこの誰なんだろう」

俺と柚香は今後の計画を立てるために夢の中で現実を見ながら作戦会議中である。

「どうする？」

「暇だし、蜜柑ちゃんのところに遊びに行こう」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3620z/

---

学園アリスの世界に転生

2011年12月17日18時51分発行